

アンリ・ピレンヌの業績について

増田四郎

一

二十世紀前半における最も偉大なヨーロッパ史家の一人として、アンリ・ピレンヌ(Henri Pirenne, 1862—1935)の名を擧げることが、おそらく誰にも異論はあるまい。しかし何がその偉大さと親しさの原因であろうかという段になると、問題は決して簡単ではない。というわけは、ピレンヌは決してカール・ランプレヒトの『ドイツ史』にみる如き龐大な民族史を編述したのでもなければ、またマックス・ウェーバーの如く、社會學的觀點に立つ深遠な世界史的考察の體系をうちたてようと試みたのでもない。ましてや今日アーノルド・トインビーが、西ヨーロッパ文化の在り方への文明批評的な關心を中心に、世界全史のみなおしをなしとげたが如き斬新さと新規さとを、彼の所説にもとめようとするには全く無駄である。畢生の大著『ベルギー史』(Histoire de Belgique. Bruxelles 1900—1932)全七卷の偉業をのぞけば、ピレンヌの著作活動をもつて、とりわけエネルギッシュであつたと呼ぶことは、おそらくあ

アンリ・ピレンヌの業績について

たらないであろう。しかもまた彼の學風は、アルフォンス・ドーブシュの敘述にみる如きボレミクを中心とするものではなく、學説としての自己の主張は、すくなくとも表面上はきわめて控え目である。それにもかかわらずビレンヌの諸著作は、現に西ヨーロッパの學界で最もひろく讀まれてゐる學術書の一つとなつており、歴史家も理論家も、いやしくもヨーロッパ社會經濟史に関心を抱くものは、直接・間接にその所論から完全に自由ではあり得ないというほどのつよい影響をうけてゐるのである。それは一體何に基因するのであろうか。

この理由を説明するためには、一つにはビレンヌの人となり、交友關係、研究過程等についての詳しい考證が必要であるが、寡聞にしてわたくしは、未だ彼の詳細な傳記が刊行されたということを聞かない。従つていまのわたくしとしては、彼の主たる諸著作に目を通し、その歿後に刊行された著書について編者の序文や諸國の學術雜誌に出た短い追悼文等を参照することによつて、わずかに彼の學風を推察し、そこからして、敘上の疑問にこたえるための、わたくしなりの解釋をみつけなければならない。

そのような意圖をもちつゝ、過去數年間わたくしはビレンヌの諸著に親しんで來たつもりであるが、結論的にいつて、彼の影響力の偉大さは、第一には、ナショナルなものとヨーロッパ的なものとの美しい調和乃至はバランスという點、第二には、發展の理論でなく、變化する體制または構造への大膽な見透しと豊富な史實理解への確信との融合という點、第三には、敘述がきわめて明快且つ平易であり、何よりも常識的な判断に一貫されていて、歴史的素材をつかつての無理な理論體系化をめざさない點等に基因するものであり、それがベルギーという國のもつ一種の國際的性格にささえられて、フランス、ドイツ、オランダ、イギリス、イタリア、アメリカ、スエーデン等諸國の學界と密

接な關連交渉を保持したためであるように思われてならない。

しかしそれは、ピレンヌの歴史研究の成果だけが、諸外國からそのようなものとしてうけとられたというだけの謂ではなく、むしろそうした環境の中から、ピレンヌ史學の精髓がつくり出されたというほどの謂であり、その事情をうかがうためには、すこしく系統的に、彼の思想の發展と研究領域の變遷とをあとづけなければならぬであろう。いずれにしてもベルギーの東境ヴェルヴィエに生まれ、活動期の大半をガン大學の教授及び名譽教授として過ごし、世界各國十六の有名大學から名譽博士の稱號をおくられ、十指にあまるヨーロッパ諸國アカデミーの會員として全歐的規模の尊敬をうけ、ブラッセル近郊ウツケルでその七十二歳の生涯を閉じた生粹のベルギー人であつたということ、ピレンヌの學風と業績を顧みる場合、吾々の絶対に忘れてはならぬことである。まことに今日におけるベルギー史學の地位は、彼によつて定礎せられ、彼によつて世界の學界にその窓を開かれたといつても、決して過言ではないのである。

二

生まれ故郷に近いマース河畔の古い町リエージュ(リュッティッヒ)の大學で、クルト(G. Korth)教授のゼミナールに参加し、地味な演習に加わつたピレンヌは、すでに學生時代から、比較的迷うところすくなく、歴史研究の途にふみこんでいた。そして言語・風俗・慣習をはじめ、政治・經濟・文化のあらゆる生活領域で、ドイツ的なものとフランス的なもの、ゲルマン的なものとローマン的なものの複雑に錯綜している祖國ベルギーの歴史的構造に、特殊

アンリ・ピレンヌの業績について

の興味をそそらされていたものと思われる。^(一)

大學を卒えた彼は、まず一八八三年から四年にかけてバリに遊學し、ひきつづき一八八四年から五年にかけてドイツの諸大學、就中ライプツヒとベルリンに留學した。わずか二十二、三歳の青年がこの遊學によつてどれほどつよい刺戟をあたえられたかは想像にあまりあるが、特にライプツヒのアルント(W. Arndt)、ベルリンのシエモラー(G. Schmoller)、ブレスラウ(H. Bresslau)等一流教授の講義には、深い感銘をおぼえたらしい。^(二)アルント教授は、ランプレヒトの師であり、また一八八四、五年の頃は、あたかもランプレヒトがその若々しい全精力を傾注して、ライン地方を中心とするドイツ中世經濟史の個別研究と、ドイツ經濟史文獻の蒐集・紹介に熱中している時代であつた。^(三)そのためカピレンヌも、この六年先輩のランプレヒトから數多くの影響をうけ、先輩として、また同學としての交友をつづけることとなつた。『ベルギー史』をランプレヒトの監修にかかると「Allgemeine Staatengeschichte」叢書の第一部門たる「Geschichte der europäischen Staaten」(Hrsg. von A. H. L. Heeren, F. A. Ukert, W. v. Giesbrecht und K. Lamprecht)の一部として執筆することをひきうけたのも、このようないきさつによるものである。留學から歸つた翌年即ち一八八六年には、二十四歳の若さではやくもガン(Gent, Gand)大學の教職についたが、それ以來一九三〇年名譽教授として退職するに至るまで、生涯彼はこの大學からはなれなかつた。たゞ第一次大戰の後半、ドイツ軍による不法な抑留生活(一九一六—一九一八年)が、一時教職を中斷せしめたに過ぎない。^(四)それゆゑこと中世史に關する限り、ドイツ學界とフランス學界との橋渡しが、この碩學の半世紀近い活動によつて、ガン大學を中心になしとげられ、文字通りベルギー歴史學界の重鎮たる地位を築きあげ得たわけである。

この間ピレンヌがどのような學會を興し、どうした講義と指導を行い、いかほど多くの高弟を學界におくり出したか、また諸外國の學者と如何なる交渉をもつたか等々は、きわめて重要な問題であるが、ここではそれに觸れることをやめ、直ちに彼がとりあげた研究テーマにはいり、それを通じての思考の發展をあとづけてみたい。蓋し學問的業績を介して、彼の影響力の偉大さと一種の親しみ易さとの理由をさぐることに、本稿のさしあたつての目標だからである。

附註

- (一) クルノーは *La frontière linguistique en Belgique et dans le nord de la France*. 2 vols. Bruxelles 1896—98. の著者であり、言語學にもとづく初期中世史の研究で有名である。
- (二) *Historische Zeitschrift*, Bd. 153, 1936. に出た R. Holtzmann の追悼文参照。
- (三) 上原專祿教授『カール・ランブレイトの生涯とその業績』(『歴史的思考入門』所收)の第一節を参照せよ。
- (四) 抑留中の思い出を記したものに H. Pirenne: *Souvenirs de Captivité en Allemagne*. Bruxelles 1921. がある。なお彼の重要な著作 *Histoire de l'Europe*. 8^{ed.} Paris et Bruxelles 1936. に附せられた序文 Jacques Pirenne の序文参照。

三

著作活動からみたピレンヌの業績は、便宜上大きくわけて、つぎの三つの部門に分類することが出来る。即ちその第一は、民族的・文化的諸要素の複合する眞只中にあつて、ベルギーという一個の國家及び民族の社會形成が如何に

アンリ・ピレンヌの業績について

して可能であつたかを究明し、言葉の最も厳格な意味における國民史を、その起源より現代まで、一貫してとらえてみせるという非常に大きな仕事である。そして第二の部門は、ベルギー史研究から發しつつも、全ヨーロッパ的規模における中世經濟史の綜括、とりわけ都市及び商工業という流通面を中心とした独自の體系樹立をめざす諸研究であり、その第三の部門は、古典古代末期と中世初期との關係をあきらかにすることによつて、「ヨーロッパ社會」というものの誕生とその意味とを、獨特の觀點から位置づけようとする一連の研究である。

いうまでもなくこの三者は、ピレンヌの內面的發展の必然性を示唆するものとして不可分からみあつており、必ずしも時代を追つて關心の對象が順次に變つて行つたというものではない。いいかえれば、發表された論文・著書は、概ねこれら三部門のいずれかに屬するものであるが、しかしその各々の行論の内部には、他の部門への關連の伏線といつた思想が慎重にひめられているもの多く、それが晩年に至るほど、美しい一つの體系に融け込んでゆく巧みさをもつていように感じられる。しかし全體として眺めた場合、やはり第一次世界大戰による物心兩面のショックが最大の轉換契機となつており、その限りでは第三の部門、即ち古代末期地中海世界と中世初期ヨーロッパ世界との關係の研究が、彼の後半生をつらぬく學問的關心の焦點であつたとみて、すこしも間違ひではない。以下、この三つの研究領域とその相互關係のあらましを述べてみよう。

まず大學の教職についてから二年の後、一八八八年に公刊した特殊研究が、*Histoire de la constitution de la ville de Dinant au moyen âge. Gand.*であつたことは、當時一種の最盛期をつくり出しつつあつたドイツ學界における中世都市の法制史的・社會經濟史的研究の動向に對應するものであつたと考えられる。即ちフォン・ペロ

ウ (G. v. Below) の矢つぎばやな勞作の發表をはじめとして、ランプレヒト、ビュッヒアー (K. Bicher)、『フレン
スドルフ (F. Frensdorff)』、ニツチュ (K. W. Nitsch)、『ヘーゲル (K. Hegel)』、『ヤストロウ (J. Jastrow)』、『コッパ
マン (K. Koppmann)』等々吾々の熟知している諸家の都市研究が續出したのも、丁度この年代にあつてゐた。

それゆえビレンヌの歴史研究は、ベルギーを中心とするライン下流からフランドルにかけての中世都市と商工業の
分析に發するといえるが、しかしそれは、實は彼の最大の主著『ベルギー史』の準備中に出て來た副産物たる性格を
も含んでゐた。即ち彼はドイツから歸つて後は、銳意『ベルギー史』第一卷の構想をねり、文獻と史料の蒐集に不斷
の努力をはらつてゐた。このことは、一八九八年の十一月にはすでにフランス語による第一卷のマスキリプトから
アルンハイム (F. Arnheim) によるドイツ語譯が完成しており、翌年それがゴータのペルテス書店から公刊せられ
たこと、並びにあの著名な文獻目錄である Bibliographie de l'histoire de Belgique. Gand. (3e éd. Bruxelles et
Gand 1931.) の初版が、それにさきだつ六年、即ち一八九三年に出版せられてゐること等からも推測することが出來
る。そして『ベルギー史』第一卷のフランス語版は、ドイツ語版の出た翌年、即ち一九〇〇年にブラッセルから刊行
されたわけである。^(註)

社會經濟史に重點を置きつつも、政治・法制・文化の全面にわたるベルギー史の完成という目標を一方にもち、他
方、中世都市及び商工業の在り方を、個別研究にもとづきつつ、全ヨーロッパ的規模に擴大綜括しようとする意欲を
抱いたビレンヌは、偉大な歴史家の多くが踏む最も基本的な常道をえらんで、まず自分の研究の裏づけとなる史料の
蒐集・編纂を企てることとなつた。上掲の『ベルギー史文獻目錄』もその一つのあらわれであるが、それよりもエス

アンリ・ビレンヌの業績について

ジュナ (G. Espinas) との共編にかかるフランドル毛織物工業史史料集、即ち *Recueil de documents relatifs à l'histoire de l'industrie drapière en Flandre*. 4 vols. Bruxelles 1906—1923. を完成したことは、眞に畫期的な不滅の業績であつた。この地味な仕事を通じて彼は、フランドル地方における中世都市成立の具體的經過、毛織物工業の都市集中という現象が意味するもの、資本家擡頭の具體例、ベルギーがもつヨーロッパ經濟史上の地位等々といった重大なテーマへの解答を、絶大な自信とともに準備することが出来たらしい。ベルギー史からヨーロッパ、中世經濟史への移行の關心とゆとりとは、既にこの頃からめばえていたのである。

即ち世界大戰が勃發する前年、一九一三年までに『ベルギー史』のドイツ語版全四卷（これは一七九八年までを取扱つてゐる）を書きあげたビレンヌは、*Les villes et les institutions urbaines*. 2 vols. 5e éd. Bruxelles 1939. の如き都市研究の著作をなすかたわら、中世經濟史一般についての短い論文を多數に發表した。それらの中で特に吾々の注目すべきものは、ドイツの『社會經濟史四季刊誌』に出た *Draps de Frise ou Draps de Flandre ? Un petit problème économique à l'époque Carolingienne*. (VSWG. Bd. 8, 1909) と、アメリカの歴史雜誌に掲載された *Stages in the social History of Capitalism*. (AHR. vol. XIX, 1914) (なギルバート) *Les périodes de l'histoire sociale du capitalisme. 1071—1914* の “Bulletin de l'Académie Royale de Belgique” のせられ、ちやにその後一九二二年に單行本としてブラッセルで刊行された）の二編である。そのわけは、前者は吾々が第三の部門として分類した初期中世、即ちカロリング王朝時代經濟史につながる問題をふくんでおり、後者は當時やかましく論議せられた資本主義起源論に對するビレンヌの徹底した立場を代表するものだからである。とりわけ後者は、一九一

三年に開かれたロンドンにおける國際歴史家會議の席上でのビレンヌの講演と關聯があり、その論旨は、ゾンバルト (W. Sombart) によつて、「アンリ・ビレンヌの如き著名な歴史家が、全世界の専門家達を前に、資本主義の發展様相に關して、まさにおどろくに足る無知 (stimmenswerten Ahnungslosigkeit) を證明した」とまで酷評されたものである。^(六)しかし理論的な要請の缺如が、斷じて史實についての無知や無思慮の證明であり得ないことは、その後におけるビレンヌの著作に對する各國史家の高い評價がこれを裏書するであろう。ビレンヌは決してゾンバルトの如き經濟學者であつたのでもなければ、またマルクス主義者の如き資本主義社會を考へていたのでもない。^(七)

それはとにかく、ビレンヌの中世都市論並びに商工業史に重點を置くヨーロッパ經濟史の綜括は、第一次大戦以前にはいまだ完成されてはなかつた。つまりヨーロッパ中世史の全體にその視野をひろげながらも、この時期まではなおベルギー中心の考へ方から脱却しておらず、いわば力作『ベルギー史』の著者としての社會經濟史的論稿を、諸學術誌や學會で發表している段階であつた。

ところがこのような段階から、第一次大戦中の苦難の經驗と内省をきつかけとして、急速にビレンヌの史觀が新しい次元に圓熟・展開することとなり、フランス語版の『ベルギー史』續編の完成にとめつつも、眞にヨーロッパ的なスケールでの經濟史家、否、最もユニークな一般中世史家たる面目を發揮することとなるのである。その點ビレンヌは、アルフォンス・ドーブシュ (A. Dopsh) やクリストファー・ドゥソン (Ch. Dawson) 等と同じく、^(八)世界大戦というものを最も眞摯に省察し、そこから汲みとつた思考を最も正しく自己の學問研究に活かし得た數すくない偉大な歴史家の一人であつたと斷言することが出来る。

アンリ・ビレンヌの業績について

一橋論叢 第三十卷 第五號

(五) ヴレンヌの『ベルギー史』は、べきのような關係を公刊をせらる。即ち *Geschichte Belgiens* (Heeren-Therets *Geschichte der europäischen Staaten*), 4 Bde. Gotha 1899—1913. これは一七九八年までの敘述。フランス語版ではその後の敘述をも加え、*Histoire de Belgique*. 7 vols. Bruxelles 1900—1932. として完結した。第一次大戦の勃發が一つの原因となつてゐるのである。

(六) W. Sombart: *Der moderne Kapitalismus*. Bd. I, 6. Aufl. München u. Leipzig 1924. の巻頭でせられた『第二版への序文』第一八頁を参照せよ。

(七) 一例をいへば、その論旨の歸結はとにかく、最近におけるドブブ (M. Dobb) やスウィージー (P. M. Sweegy) の論争にみるビレンヌ引用の多いこと、如何なる立場をとる人も、中世經濟史に關してビレンヌが指摘した史實に無關心であり得ないこと等からも推測されるであらう。英・佛・獨の三ヶ國語でビレンヌの主要な著作が讀まれてゐる廣さは、實におどろくほどである。

(八) これについては拙稿『アルフォンス・ドープシユ』(『社會經濟史學』第一六卷二號所收)、『歐羅巴世界成立史觀の諸類型』(拙著『ヨーロッパ社會の誕生』所收)等を參看されたい。

四

一九一四年八月、ドイツ軍のベルギー侵入によつて、ビレンヌの祖國は西部戰線最初の激戰場と化した。その年の十一月にはイーゼル河畔の戰鬪で、愛息ビエルの戦死が報ぜられた。ビレンヌはなおガンの私邸にふみとどまつて戦争のなりゆきを案じていたが、一九一六年三月一八日、突如ドイツ占領軍にとらえられ、單身クレフェルトのキャン

プに收容せられた^(九)。彼の苦しい、だがその思索の發展上きわめて重要な抑留生活は、この時からじまる。

同じキャンプにはロシア人の捕虜が多数にいた。ここでピレンヌはまずロシア語を學ぼうと決意するのであるが、間もなくその五月には身柄はホルツミンデンにうつされ、そこで多くの體驗を味わうこととなつた。その詳細は、彼自身の筆になる *Souvenirs de Captivité en Allemagne. 1921.* に、一種のユーモアとともに記されている。捕虜收容所というものは、その所長の人柄如何によつて、捕虜の待遇に非常な差があるものらしい。比較的ものわかりよい所長のもとでは、捕虜達は最大限の自治的運営をまかされ、バラックや道路に一々大げさなユーモラスな名稱をつけ、いわゆる「大學」をつくつていくつかの講義を聞くことも、大目にみられるほどであつた。ピレンヌは早速このにわかづくりの「大學」で「教授」となり、二つの講義をうけもつた。参考書一つない講義であるが、丹念にノートをつくり、知識のエッセンスを整理した。とらわれの身であることから來る思考の亂れと焦躁は、片鱗さえみられなかつた。そして含蓄ある大家の通論は、却つて異常な人氣をよんだ。ピレンヌは後日、この時ほど熱心な學生の態度はみたことがないと述べている^(一〇)。彼はリエージュの戦場で捕虜となつた二、三百名のロシアの青年達に對しては經濟史の通論を、祖國ベルギーの捕虜達にはベルギー史の通史を講じた。その間彼はロシア語を習得し、東ヨーロッパ史の全體に大きな興味を抱きはじめた。ヨーロッパ史の綜觀に對する構想は、この頃急速にめばえはじめたものである。

ピレンヌの不法な抑留は、常に本國の學界ばかりでなく、アメリカ、スエーデン、デンマーク等の學界にも異常な同情をよび、中立諸國のアカデミーをはじめ、アメリカ大統領ウイルソンやローマ教皇さえ、その釋放に努力したほ

アンリ・ピレンヌの業績について

どであつたが、ドイツ當局はこれを許容せず、結局身柄をイェナに、ついでチューリンゲンの小都市クロイツブルクに、そして最後に再びホルツミンデンに軟禁する處置をとつたに過ぎない。しかしこの軟禁中は、かなり自由に讀書も出來、また特にロシア史の勉強にいそむことが出來た。あの名著『ヨーロッパ史』(Histoire de l'Europe. 8^e éd. Paris et Bruxelles 1936.)は、このような不自由な環境の中で出來上つたものである。即ちこの書の初版の序文は、ウエッラ河畔のホルツミンデンにおいて、一九一七年一月三十一日に書かれ、そして「いまは亡き愛息ビエルと、愛する妻並びに息子達への紀念に」ささげられている。

わたくしはこれ以上くわしくビレンヌの抑留生活そのものについて語るいとまはない。ただここで強調して置きたいことは、つぎの諸點である。

即ちその第一は、愛息の一人を戰場にうしない、家族ときりはなされて敵國で抑留の生活を餘儀なくされた一個の人間が、あたかもそのことを轉機として、心の傷手を轉じて、いままでの研究の基礎の上に、一層大規模且つゆたかな史觀の完成にみごとに成功したという點である。歴史研究を轉じて、戦後あの當時やかましく論議せられたヨーロッパ文化への文明批評や時論を企てることは、『ベルギー史』の著者にして捕虜生活の體驗者である彼の資質をもつてしては、比較的安易な途であつたらう。しかし彼は、そのような途をえらばず、飽くまでも歴史家としての自己の成長に精進した。戦後の圓熟した史觀は、すべてこの時期に約束されていたものと考えられる。

その第二は、抑留生活の體驗からして、ドイツ人特にプロイセン流の生活感情やもの考え方を、相當批判的に眺めることとなり、その結果として、ドイツ史學界で論議されている如き法制史及び社會經濟史の問題のたてかたにも、

或種の疑念をさしはさむとともに、あえていえば、この時以來、ドイツ學界のインフルエンスから自己を解放することが出来たという點である。従つてすくなくとも第一次大戦以後のピレンヌをもつて、ホルツマン(R. Holtzmann)のいう如く、「ドイツ史學の學風をベルギーへうけいれたすぐれた歴史家」などときめつけることは、あたつていない。⁽¹⁾むしろフランスの學界と密接な關係を保ち、ドイツ、フランス兩國の動向を熟知しながらも、独自のヨーロッパ觀をうちたてたものといふべきであらう。

その第三は、ロシア人とロシア史を知つたピレンヌが、まづたく新しいホリゾンと視角から「ヨーロッパ」の全體を考へることとなり、その結果、一つにはヨーロッパ史及びヨーロッパ經濟史の概説を、いま一つには、ヨーロッパ社會の發展史上に占めた祖國ベルギーの位置づけについての再吟味を行う境地に達したという點である。上述した如く、參考書もなしに、ローマ帝國の没落からルネッサンス、リフォーメーションまでの全史をまとめ、その中でイスラムの侵入やビザンツ、十字軍、スラヴ諸國やハンガリー、トルコ等の歴史的役割までも公平に、しかも一貫して敘述した『ヨーロッパ史』の構想は、このことを立證してあまりあるものがある。

最後にその第四は、國民史ではなく、「ヨーロッパ」というものが、いつ如何にして成立したかという問題への着眼である。抑留生活中、各國の捕虜が相寄つて共同生活をしている間に、おのずから出來上る最も純粹な人的結合としてのコミュニティーの體驗、しかもその運営が案外スムーズに行われ得たという體驗、ピレンヌはこのことから、國境や民族を越えたヒューマニスティックな感情と協同體の意義を體得した。それと同時にまた、彼にはヨーロッパ、とりわけ西ヨーロッパ人と西ヨーロッパ社會の共通性に對する興味が湧いていた。このことが彼をして單なる中世史

アンリ・ピレンヌの業績について

家におわらしめず、さらに一步をすゝめて、ヨーロッパ社會がいつ、何を契機に行われたかを追求せしめる動機となつたものの如くである。勿論それには、一九一七年以降のロシアのうごきとヨーロッパとの關係が、深く考慮されていることはいうまでもない。とにかく古典古代と初期中世の關係が、彼の後半生の最も主要なテーマとなつたわけである。

以上四つの點は、いわばビレンヌの最もすこやかな思索の發展であり、史觀の圓熟である。自分の所説に對する諸々の反駁と批判に、一々論争のかたちでたちむかうというのでもなければ、さりとして自國の學者達の問題のたてかたに束縛せられて、いたずらにむずかしい理論體系をうちたてようとするのでもない。フランス、ドイツ、イギリス等の學界動向にも澄みきつたまなことをそそぎ、ベルギー史の史實への自信をひそかに強めつつも、いわば淡々たる氣持で「ヨーロッパ史」の全體を眺め、それを自分なりに綜括しようとの心境に立つてゐるのである。その點、彼は隣國の學界を敵視する偏狹さもなければ、逆にまた、人間の營みや文化そのものに個人的・主觀的な興味を抱くほどのコスモポリタンでもない。

ヨーロッパとは何か、その社會の體制と構造とはどのように變化し、發達して、近世に入つたか、その中でベルギー地方はどんな役割をはたしたか、これが大戰後におけるビレンヌのテーマであり、彼の名を不朽たらしめた數々の著作は、いずれもこのテーマから發した果實であつたのである。では後半期の著作活動は如何なるものであつたろうか。一九一八年の休戦とともに、間もなく再びガン大學の教壇にかえつた後のビレンヌを考えてみよう。

(九) H. Pirenne: Histoire de l'Europe. 3e éd. Paris et Bruxelles 1936. (英譯・A History of Europe from the In-

vasions to the XVII. Century. London 1939.) に附せられた Jacques Pirenne の序文による。

(10) H. Pirenne: Souvenirs de Capitivité en Allemagne. pp. 38—9.

(11) Historische Zeitschrift. Bd. 153, 1936, S. 451. の追悼文参照。

五

第一次大戦後のピレンヌは、もっぱら古代末期、中世初期の社會經濟史に個別研究を集中するかたわら、他の部門では、逆にきわめて「大膽且つ包括的なシンテーズ」の方向をたどるようになった。⁽¹²⁾ 即ち前者のさきがけとしては、
* Revue Belge de Philologie et d'Histoire. 第一卷(一九二二年)にせられた小論文、Mahomet et Charlemagne. がこれを立證している。この論文の表題が、彼のあまりにも有名な後述する遺著と全く同じであることよりみても、その構想のあらましが、すでにこの頃出来上つていたことが推定される。

同じ一九二二年の十二月には、ピレンヌはアメリカに旅行し、その諸大學で數回の講演を行った。この講演をもとにして刊行されたのが、Medieval Cities, their origins and the revival of trade. Princeton 1925. (本書は後にフランス語で、Les villes du moyen âge. Bruxelles 1927. として公刊せられた)であり、都市を中心としたヨーロッパ中世史の概観が、巧みに明快に敘述せられている。イタリア北部とベルギーをふくむ低地地帯とを、商業復活の二大基地としてとらえ、商人定住説を根幹とする中世都市起源論がはつきりと展開されたのは、この書においてであつた。その意味で本書は、従来の『ベルギー史』のための一連の個別研究からみれば、あまりにも飛躍的なジャン

アンリ・ピレンヌの業績について

テューゼとさえ思われる最初の著作であるが、その理由は、『ベルギー史』第一、二巻の慎重・廣範な配慮^(二三)と、上述した大戦を契機とする内面的轉換の事實を想えば、必ずしも根據なき飛躍ではなからう。

アメリカから歸つたビレンスは、ひきつづきメロヴィング王朝及びカロリング王朝期についての小論文を發表し、その關心の深さは彼の死の直前に至るまでかわらなかつた。即ちその主なるものだけを擧げてみても、つぎの諸篇がみえられる。Un contraste économique. Mérovingiens et Carolingiens. (Revue Belge de Philologie et d'histoire. t. II, 1923); Le fisc royal de Tournai. (Mélanges d'histoire du moyen âge. offerts à M. F. Lot. Paris 1925); Le commerce du papyrus dans la Gaule Mérovingienne. (Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres. 1928); Un prétendu drapier Milanais en 926. (Studi Medevali, Nuova Serie, t. I, 1928); Le Cellarium Fisci, une institution économique des temps Mérovingiens. (Bulletins de l'Académie Roroyale de Belgique. 1933); Le trésor des rois Mérovingiens. (Festschrift til Halvdan Koht, Oslo, 1933); La fin du commerce des Syriens en Occident. (Annuaire de l'Institut de Philologie et d'histoire orientales. t. II, 1933—34); De l'état de l'instruction des laïques a l'époque Mérovingienne. (Revue bénédictine, 1934). これらのすべてが、あのすばらしい遺著の素材、それへの着實なスケッチであつたことはいうまでもない。^(二四)

その間彼は、『ベルギー經濟史』、中世商業史、中世工業史等に関する多數の個別研究の小論稿を發表し、また“Peuples et Civilisations”叢書の第七卷 La fin du moyen âge. 1285—1492. Paris 1931. の中で、A. Renaudet, E.

Perroy, M. Handelsman, L. Halphen 等と並んで、中世末期社會經濟史に關する三つの章を執筆した。^{(1)(註)}

そしてこれだけの準備をもととして、一舉に中世經濟史全體の概觀をまとめあげたものが、G. Glotz の編纂にかゝる『Histoire Générale』叢書中の第二部第八卷、La civilisation occidentale au moyen âge. Paris 1933. 中におぼめられた Le mouvement économique et social au moyen âge du XIe au milieu du XVIe siècle. である。従つてこの書は、わたくしがさきに分類したビレンヌの研究の第二の部門の總決算であり、一般史における『ヨーロッパ史』とともに、彼の經濟史研究における到達點を明示するものといつて過言ではない。またこの書が、上述した Les villes du moyen âge. の構想と重複するところ多いのも、やむを得ぬところである。否、それどころか、このことこそ、彼の史觀が美しい一つの體系に融け込んでゆくプロセスの證左として、吾々は高く評價しなければならぬ。それゆえ刊行後ほどなく英譯が單行本として出され、またドイツ語譯が出て、今日經濟史研究上必讀の名著となつてゐるが、そのことは決していわれなきことではな^{(1)(大)}い。

以上が抑留生活の體驗以後一九三五年の死に至るまでのビレンヌの主要著作のあらましである。この十六、七年間の彼は、學會、講演旅行等での活躍めざましく、國內の諸大學をはじめ、アメリカ、フランス、イギリスから、ローマやカイロ大學にまでも講演に出向いてゐる。また海外の學者との交渉もしげく、記念論文集や雜誌寄稿のかたちで、外國で刊行された論稿もすくなくない。

そのような多忙な日常生活の中で、死の直前、即ち一九三五年五月四日までペンを措かなかつた大部の原稿が、ほとんど完成したかたちで、彼の机上にのこされてゐた。それが彼の後半生の精進を知る珠玉の遺著となつた Maho-

アンリ・ビレンヌの業績について

met et Charlemagne. であり、愛息 Jacques Pirenne と彼の高弟 F. Vercauteren の校訂を経て、一九三七年に刊行された^(一七)。ジャックがその序文に述べている如く、これこそピレンヌの長年の研究のクライマックスであり、彼の抱いていたすべてのアイディアを含む名著となつたものである。ゲルマン民族の侵入に關しては、くしくもドーブシュと類似した文化の連續を主張し、地中海的統一の斷絶・破壊をイスラムの侵入によるものと斷じ、そのことによつて、農耕中心の封建體制に變質せざるを得なかつた西ヨーロッパの全貌を、メロヴィング王朝期とカロリング王朝期との「經濟的コントラスト」によつてとらえるという經濟、とりわけ商業交易の在り方を中心としたあの周知の歴史觀は、この遺著によつてあざやかになすとげられたわけである。

この名著の完成は、さきにかかげた八つの小論文が直接の素材となつてゐるのは明白であるが、それと同時にまた、大きくみれば、十一、二世紀における「商業の復活」という前著の構想に對して、最も雄辯な證左と解答を呈示したものともし得る。古典古代と中世との關係は、本書を俟つてはじめて、ピレンヌの史觀の中で、如何にもピレンヌ的な方法で、はつきりと説明せられた。このように考へるならば、『ベルギー史』全七卷を書きあげ、『ヨーロッパ史』と『中世社會經濟史』とを綜觀したピレンヌは、『マホメットとシャルルマーニュ』によつて、まことに畫龍點睛の遺著をのこしたものだといえるであらう。ともあれ、この遺著が直ちに英譯せられ、またドイツ譯せられて、今日も最もひろく親しまれる歴史書の一つとなつてゐるのは、まさに本書の眞價に應えるものである。

- (一七) Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte. Bd. 28, 1935, S. 408 f. とも Franz Petri の追悼文参照。
 (一八) ここでは中世都市の成立とその經濟的發展に非常なウエイトを置いており、さすがに都市の具體的史實に關する確信

のほどをしめしているが、しかしいまだ『商業の復活』という考え方を、それほど前面にはもち出してはいない。

(一四) これら諸篇の中には今日容易に入手し難いものがあるが、幸いにも一九五一年、E. Coornaert の編纂にかかる論文集が刊行せられ、その中にすべて収録せられた。即ち H. Pirenne : Histoire économique de l'Occident médiéval. Bruxelles 1951. がそれである。この書に附せられた編者のピレンヌ傳は、短文ながら本稿の執筆に参考となつた。

(一五) これらも前掲の論文集に收められている。

(一六) 英譯は Economic and social History of medieval Europe. London 1936. 邦譯は『中世ヨーロッパの社會と經濟史』。H. Pirenne : Mahomet et Charlemagne. Paris et Bruxelles 1937. 邦譯は『モハメドとシャルルマニエ』。Bern 1951. 邦譯は『中世ヨーロッパの社會と經濟史』。

(一七) H. Pirenne : Mahomet et Charlemagne. Paris et Bruxelles 1937.

(一八) その内容の梗概については、拙稿『フランク王国の商業交易』(『獨逸中世史の研究』所収)を參看されたい。

(一九) 英譯は Mohammed and Charlemagne. New York and London 1939. 邦譯は『モハメドとシャルルマニエ』。題名を變えて、Ge-burt des Abendlandes. Leipzig 2. Aufl. 1941. として再行された。

六

以上をもつて吾々は、著作を中心としてみたピレンヌの業績を、いわば外側からあとづけ得たと思う。そしてその關心がかなり多方面に及んでいるとはいへ、著作活動がとりわけエネルギーにあつたとはいへないこと、並びにドイツ流の學者に屢々みうける如く、自分の體系を世界的な考察にまでひろげようとする如き意圖が存しなかつたことを知つた。いいかえれば、ヨーロッパ、特に西ヨーロッパ的體制的成立と發展とが、彼の視界の極限であり、

アンリ・ピレンヌの業績について

それがベルギー地方の社會經濟史と常に不可分な關係においてとらえられていたのである。従つて吾々がさきにピレンヌの研究領野を三つに分類したことに應じて、彼が學界にのこした名著を擧げるとならば、躊躇するところなく、第一の部門については『ベルギー史』を、第二の部門に關しては『ヨーロッパ史』と『中世社會經濟史』の二つを、そして第三の部門については遺著『マホメットとシャルマーニュ』を、それぞれそれにあてることが妥當である。

そこで最後に吾々は、これら三部門の四つの主著が、その問題の提起またはとりあげ方において、内面的にどのような關係に立つており、どうした共通點をふくんでいるかを一瞥しなければならぬ。ピレンヌの人柄を容易に知り得ない吾々としては、^(三〇)このような考察を行うことが、學說史的にみためも彼の位置づけとなるであろう。

まず第一に指摘すべき一貫した特色は、彼が徹頭徹尾、經濟社會の發展に重點を置く純然たる歴史家であり、宗教的な臭味や文明批評の氣持を持ちあわせなかつたという點である。しかもその經濟とは、彼にあつては何よりも交易・流通部門のことであり、商工業と都市生活の勃興とが關心の焦點であつた。そのことからして、彼には農村社會の獨自の發展や構造や變革を把握する敘述が、比較的弱いという缺點があらわれる。しかしまた彼は、單に都市の發達や貨幣經濟の滲透によつて、中世社會が漸次に崩壊して行つたなどという古い常識論を墨守してゐるのではない。中世そのものの中の交易の要素を、きわめて高く評價してゐるのである。そのわけは、おそらく彼が個別的・具體的に研究した社會が、ベルギーを中心とする先進的地域であり、そこにイギリスやドイツ、フランス等の史家の通説と必ずしも一致し難い現象が多々存在したことを、身をもつて熟知していたからであろう。

第二に、彼の全體系の中で、特に問題の核心をなしたと思われるテーマをさがしてみると、(一)アラビア人の侵入

による地中海的統一の破壊、(二)十一、二世紀頃北部イタリアと低地地方を基地としておこる商業の復活なる新現象、並びに(三)資本主義起源の問題という三つがそれであつたように思われる。

この中の最初のテーマは、いうまでもなく、メロヴィング王朝末期までの古典古代的交易體制並びに經濟感情の存続の證明に向けられ、回教徒の侵入という外敵によつて、はじめて農耕的封建社會が西ヨーロッパに成立すると説くものであるが、いわゆる Arabergelahr の重大視が、大戰末期ロシアの現實にヒントを得たものであるかどうかは、きわめて興味深い問題である。いずれにしても、この構想や着眼を根據づけるためには、一つには「地中海的統一」なる交易圈のその當時の實際を研究すること、いま一つには、アラビア人の西方への侵入ということが、はたしてそれほどの隔絶したカーテンであつたかどうかを調べることに、そして最後には、メロヴィンガー社會經濟の實態とカロリング時代のを、あらゆる生活面にまで掘下げて比較考證することが必要であろう。國際的商品の有無やそれへの評價感の變遷、そのトレーガーの交替のみをもつて、このような見透しの最大のメルクマイルとすることは、なお若干危険なものがあるのではなからうか。^(二一)

つぎの主要テーマである「商業の復活」(La renaissance du commerce)については、ビザンツとイタリアとの交渉、並びにベルギー地方がもつヨーロッパ史上での役割という見方が、共同の根柢となつてゐる。しかしこの問題を中世都市起源論一般の立場から眺めた場合、ビレンヌの所説は、あきらかにジグフリート・リーチェル(S. Rietschel)の流れを一步すすめ、今日のハンス・プラーニッツ(H. Planitz)の所説に橋渡しする地位を占めるものである。この意味で、ビレンヌがヨーロッパ中世都市研究史上にもつ貢獻はきわめて大きい。^(二二) たゞ問題は、北部イタリア

と低地地方との商業復活現象を、同じ次元において強調し、都市發生の起源をあのよう一般化することが可能であろうかという點である。

最後のテーマたる資本主義の起源については、すでに經濟學またはマルクス主義の立場からする歴史家達から、多くの批判と反駁が向けられている。ピレンヌのいわば超理論的乃至は後理論的ともいべき所論、とりわけ *houveaux riches* や *patrimoine* の考えが、はたして近代資本主義成立の構造的理解に役立つかどうか、否、それよりも史實としてうごかし難いものであるかどうか、吾々にはなお多くの疑問がのこされているように思われる。^(二三)

それらとはかく、以上三つのテーマは、地中海的統一交易圏——アラビア人の侵入によるその斷絶——農耕的封建社會としてのヨーロッパの誕生——十一、二世紀における商業の復活——ヨーロッパ史上ベルギー地方がもつ積極的意義の重要性——資本家階層の發生——封建社會の崩壊という一連の構想の中で、相互に不可分に結合しているのであつて、その関連性を發見し、證明してゆくことこそ、全著作に一貫した目標であつたわけである。このように考へるならば、わたくしが分類したピレンヌの三つの部門というものは、決して恣意的にテーマを順次にかえて、後でそれらをむすびつけたという如きものではなく、漠然とながら最初から、そしておそらく第一次大戦をきつかけとして一層明瞭に、その體系の完成を約束されていたもの如くに考えられる。そのことが、晩年に至るほど、如何なる短篇といえども、究極的な全體に融けこむ美しさを含んでいる如く感じられる所以であらう。

そこで最後に第三として、ピレンヌの體系に共通している一種の弱みともいべき點をあえて指摘するならば、農業制度並びに封建制度というものに對する分析が缺けている點を擧げることが出来る。地中海交易圏の統一性という

問題も、その當時のローマ末期の農耕社會とどう關連づけてよいのかが疑問である。また特に目立つことは、カロリング王朝期より商業の復活する十一、二世紀に至るまでのティピカルに封建的であつた時代の農地經營、即ちグルントヘルシャフトの成立、構造、經營、變質、生産力、生産技術等について語るところが案外すくない、否、弱いことである。政治史、法制史については、ベルギー史に關する限り、かなり詳細な研究がなされたけれども、全ヨーロッパ的スケールにおける政治史、とりわけ法制と經濟のつながりの問題が、ほとんどとりあげられていない憾がある。そのため「商業の復活」という表現によつて、却つてこの現象にふくまれてゐる當時の社會の最も重要な變質過程が、みのがされてゐるようにも思われる。

これらのことがらは、わたくし自身がビレンヌの諸著を通讀して感じた斷片的な不満であるが、しかしそれと同時に、こうした不満なり疑問なりから、いま一度ビレンヌの偉大さを再認識してゆく途がみつかるとはならないかと考へてゐる。ビレンヌが提起した問題が、イギリスの史家クリストファー・ドウソンの如き人達に大きな影響を與へたと、またもの考へ方、特に民族移動の考へ方に、ウィーンの著者アルフォンス・ドープシュの主張と一脈相通する面がふくまれていること、^(三四) ヨーロッパ文化やヨーロッパ社會の問題が、第二次大戦後再びあらたに論議の的となり、その點からもビレンヌの所説がすくなくならず参照されていること、マルクス主義者が具體例をひく時、好んでビレンヌの擧げる史實を引用する傾きがあること等々、現在のヨーロッパ、否、世界の史學界でのビレンヌの評價について語らなければならぬことが非常に多いのであるが、本稿では冒頭にことわつた如く、たゞ著作を通じての業績をあとづけることを目的としたため、一應これにてビレンヌの小傳を描くことにしたい。彼の著作以外、参照すべき文

獻がほとんどなかつたため、わたくしの考えが大きな誤謬・誤解を犯しているのではないかをおそれるものである。

(二〇) ヒレンヌの手柄に簡単にふれ、主たる著作を挙げてその學風を述べたもの下、ホイジンガ(J. Heizinga)の短文 *He-nri Pirenne (Handelingen en levensberichten van de maatschappij der nederlandse letterkunde te Leiden, 1934—35)* (後々 J. Heizinga: *Mein Weg zur Geschichte*. Basel 1947, S. 121—132. 収録) があつた。

(二一) これらについて一層詳しいことは、拙稿『フランク王国の商業交易』(『獨逸中世史の研究』所收)を参看されたい。

(二二) 拙稿『商人ギルド起源考』(『西歐市民意識の形成』所收)参照。

(二三) それと関連しては、古くは G. v. Below: *Die Entstehung des modernen Kapitalismus*. (in: *Probleme der Wirtschaftsgeschichte*. Tübingen 1920. S. 399—500) 新しくは M. Dobb: *Studies in the development of Capitalism*. 4th. Imp. London 1950. の如き所論が比較参照のべきである。

(二四) ドーニンとの關係については、拙稿『古代より中世への轉換の問題』(『經濟研究』第三卷第四號所收)を見られた
5。